様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７２０００７

研究課題名（和文）メタ存在論における反実在論的アプローチの擁護可能性についての研究

研究課題名（英文）Anti-realism in metaontology

研究代表者
井頭　昌彦（IGASHIRA, Masahiko）

一橋大学・大学院社会学研究科・准教授

研究者番号：７０５３３３２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：研究期間全体としては、形而上学における反実在論的アプローチの可能性を擁護し、その１つの具体的立場を提出することを目指した。平成24年度においては、「プラグマティズム・体系内在主義・物理主義--植原氏、佐藤氏、成瀬氏への回答--」および「「心を持ったロボットをつくる」というプロジェクトはどのようなものでありうるか？」という論文を、平成26年度においては（平成25年度の研究成果を引き継ぐ形で）「《プラグマティックな自然主義》と３つの課題」および「物語り論的アプローチによる自由意思擁護論の再検討--諸コンテクストはそもそも／どの程度統合されねばならないのか？--」という論文を出版した。

研究成果の概要（英文）：The purposes of this research are to vindicate of the possibility of anti-realism in metaontology and to put forward an anti-realistic position. In 2012, papers titled "Pragmatism, Immanentism, Physicalism; Replies to Uehara, Sato, Naruse" (in japanese) and "What does the creation of robots with MIND amount to?" (in japanese), and in 2014, papers titled " 'Pragmatic Naturalism' and three issues on it" (in japanese) and "On the Narrativist Argument for Free Will: To What Extent Do We Have to Unify the Modal Contexts?" (in japanese) were published.

研究分野：分析哲学

キーワード：反実在論

１．研究開始当初の背景

分析哲学の手法を用いて形而上学的問題を論ずる「分析的形而上学」という分野は、近年の分析哲学において最も勢いのある研究領域であるが、なかでも「何が存在するのか？」という問題を扱う「存在論」の隆盛ぶりは目覚ましく、物理的対象に関する論争一つとってもUniversalism, Nihilism, Monism, Fictionalismといった立場（これらにはさらに下位分類がある）が競合して活発な論争が展開されている。

他方で、こうした論争の中で次第に明らかになってきたことだが、存在論的論争においては、しばしば論者間で主張の妥当性判定基準自体が異なっており、その結果として意見の収束をみることが困難になる、という事態が指摘される。そして、近年では、こうした膠着状況を打開するために「メタ存在論的考察」を導入し、「ある存在論的主張が《正しい》とはそもそもどういうことか」といった存在論そのものに関する構想（＝メタ存在論）の差異を分類した上で争点を整理する、という取組みがなされている。

さて、現在の分析的形而上学において主流となっているメタ存在論的整理枠組は「実在論 vs.デフレ主義」という対立軸である。すなわち、存在論的主張の正しさを「認識に先立って分節化されている世界（ready-made world）との合致」として理解する「実在論」か、ready-made worldは分節化されていない「無定形の塊」であって存在論的論争は「それを言語によってどう切り分けるか」という単なる〈ことばの問題〉に過ぎないとする「デフレ主義」か、という二項対立の元で存在論的論争が分類・整理されているのが現状である。

しかし、こうした状況は適切なものとは思われない。第一の問題は、ready-made worldの存在自体を拒否するという反実在論的アプローチが不当に無視されている点である。第二の問題は、「実在論vs.デフレ主義」という構図の下では、存在論的論争を「実質性を欠いた、単なることばの問題」に矮小化してしまうか（デフレ主義）、実質性を固守する代償として認識論的正当化の可能性を放棄するか（実在論）、というジレンマに陥る点である。

現在、分析的伝統に属する形而上学者の間で支配的なアプローチが実在論的なそれであることは衆目の一致するところである（Manley, 2009）。他方で、このことは「反実在論的アプローチに見込みがないことが既に示されている」ということを意味しない。この点を理解するには、《形而上学に対して反実在論的な見方をとる論者は形而上学に多くの研究時間を割くモチベーションを持たず、結果として実在論的解釈をとる論者が残る》といった「選択効果の存在」の指摘や（Chalmers, 2009）、科学哲学者や認識論研究者の多くが（正当化根拠の説得性という観点から）形而上学に関する反実在論を支持していることなどを挙げれば十分であろう。いずれにせよ、現在の形而上学的議論において反実在論的アプローチが十分な検討を経ぬまま打ち捨てられているのであれば、これを論争の中に位置づけ直してやることがまず求められる。

２．研究の目的

以上の背景理解のもと、本研究では、（１）こうした偏りを是正すべく基本構図を再整備した上で、（２）反実在論的なメタ存在論の一つの立場を具体的に提示することが目指すこととした。こうした取り組みの意義としては、まず「反実在論的アプローチを導入することによる議論の再活性化」が挙げられる。“mainstream metaphysics” という呼称が実在論的アプローチを前提とするものとして定着していることからもわかるように、現在の分析的形而上学者の多くは反実在論的アプローチの可能性を真剣に考慮していない。そういった中で反実在論に焦点を当てる本研究は、従来の研究とは一線を画すものとなり、「実在論vs.デフレ主義」という構図が陥るジレンマの解消をはじめとして、研究の大幅な前進が可能になる。次に重要なのは、「反実在論的アプローチの導入による、科学哲学や認識論との接合」である。科学哲学や認識論においては反実在論が比較的支配的な立場であるにも関わらず、分析的形而上学において反実在論的アプローチという選択肢が（十分な学術的根拠なしに）等閑視されていることにより、分析的形而上学者は他の領域との有益な意見交流が行いにくくなっている、という現状が生じている（この点は多くの論者が指摘している）。本研究の結果として、反実在論が少なくとも可能なアプローチの一つとして公認されれば、科学哲学や認識論の分野での議論の蓄積を形而上学に援用する道筋が拓かれることになる。特に、科学的実在論論争との接合によって、分析的形而上学の議論に大きな前進をもたらされることは疑いえない。これらに加えて、「自然主義的形而上学」という新しいムーヴメントの確立が見込まれる」という点も重要である。形而上学者の大半は、自身の研究を「経験科学とは独立に営まれるアプリオリな探求」と見なしてきた（実際、この傾向は2010 年代においても継続して支配的である）。これに対して、本研究の最終段階で提示される反実在論的立場は「経験科学との連続性」を掲げる自然主義に立脚するものであるため、形而上学研究の可能性の更なる拡張を促しうる。

以上の点を踏まえ、本研究では、まず、（１）反実在論的アプローチが適切に位置づけられうるように、メタ存在論的の基本構図を拡張して整備する事を目指すこととした。具体的には、「ready-made world は我々の認識に先立って分節化されているか」を巡って争う「実在論」と「デフレ主義」に、ready-made

world 自体を拒否する「反実在論」を加えた三項対立を軸に、存在論的主張の真理条件分析の観点から、基本構図の再構築を目指すこととした。さらに、このような仕方で論争整理枠組みを再構築した上で、（２）反実在論的アプローチに基づくメタ存在論上の立場を一つ具体的に提示し、その擁護を通して反実在論的アプローチの説得性を示す、という課題への取り組みが目指された。この取組みに関しては、「多元論的自然主義」という存在論的立場をベースとして、それを（１）で整備された枠組みに合わせて鋳直し、他のメタ存在論的立場との関係との可視化が重視される。

３．研究の方法

本研究では、分析的形而上学における反実在論的アプローチの擁護を目指して、メタ存在論に関する現行の論争構図を改変し、新規構図のもとで反実在論的立場を具体的に提唱することを目指した。この目的を達成するために、以下のサブテーマを設定した上で研究活動を進めることとした。

（１） メタ存在論のサーベイを通して、反実在論に対する現状の扱いの問題点を明確化する。

（２） 現状のメタ存在論的論争構図を分析し、反実在論を正当に扱える論争構図を再構築する。

（３） 多元論的自然主義をベースにして、メタ存在論における反実在論的立場を具体的に提示し、その説得性を論証する。

これらの課題のうち、(1) については、基本的には P. van Inwagen, “Meta-Ontology” in *Erkenntnis* (1998) から D. Chalmers et al, *Metametaphysics* (2009) に至るまでのメタ存在論研究に依拠しつつも、C. I. Jenkins, “What is Ontological Realism?” in *Philosophy Compass* (2010) をはじめとして 2010 年以降に公刊されている注目に値する諸論稿を精査し、追加分の先行研究に対するサーベイを通して論争状況に対する認識を更新しつつ、反実在論的構想に対する扱いがどのような点において不十分であるかを浮き彫りにするようなレビューを作成する作業を行うこととした。

次いで (2) については、以下のように進めることとした。メタ存在論的論争における現在の基本構図は「実在論 vs.デフレ主義」というものであるが、この両者は「ready-made world との合致によって存在論的主張の妥当性を評価する」という基本構想を共有している。そして、研究代表者の見通しでは、現在のメタ存在論がある種のジレンマ――存在論的論争を「実質性を欠いた、単なることばの問題」に矮小化してしまうか（デフレ主義）、存在論的論争の実質性を固守する代償として認識論的正当化の可能性を放棄するか（実在論）――に陥ってしまう１つの要因は、この「ready-made world との合致」という評価基準を採用している点にある。こういった事前分析を踏まえ、本研究では「ready-made world なるもの自体を拒否する構想一般」として反実在論的アプローチを予備的に規定した上で、メタ存在論的論争の基本構図の再構築を進めるわけだが、その際に中心的課題となるのは、存在論的主張の妥当性評価基準として「ready-made world との合致」を採用しなかった場合に、どういった代替的基準があり得るのかを具体的に示すことである。この点は、「反実在論的なメタ存在論」という構想そのものの成立にとって最重要課題となるが、まずは H.Putnam の「内在的実在論」、W. V. Quine の「内在的かつ超越的なものとしての真理」構想、B. van Frassen の「構成的経験主義」といった、科学哲学・認識論分野の諸見解を援用・修正することで、反実在論的形而上学という構想に実質を与えることが可能になると思われるため、これら含めた全体構図の理論的整備に取り組むこととした。

最後の (3) については、形而上学と自然主義という一見相容れない組み合わせを成立させることが課題となるが、この点については自然主義論の文脈での議論蓄積を援用し、自然主義的な存在論的枠組みを形而上学的議論に適した形態へと変形することによって対応することになる。また、メタ存在論的立場としての妥当性ないし有効性については、具体的な立場をとりあげ、まずその整合性を確認することから作業を始めることとした。

４．研究成果

平成24年度は、主としてメタ存在論のサーベイを行うと共に、反実在論的アプローチに対する現状の扱いの問題点を明確化するという作業に取り組んだ。具体的な作業としては、P. van Inwagen, “Meta-Ontology” in *Erkenntnis* (1998) からD. Chalmers et al., (eds.), *Metametaphysics*, Oxford University Press (2009) に加え、T. Sider, *Writing The Book of The World*, Oxford University Press (2011) および D. Chalmers, *Constructing the World*, Oxford University Press(2012)といった著作を参照しつつ、Rudolf Carnap, Huw Price, Hilary Putnamらの見解と比較することで、メタ存在論的論争を整理するためのおおまかな見取り図を作成した。これに加えて、前述の成果を一部援用しつつ、「プラグマティズム・体系内在主義・物理主義――植原氏、佐藤氏、成瀬氏への回答――」(雑誌論文③) および「「心を持ったロボットをつくる」というプロジェクトはどのようなものでありうるか？」（雑誌論文④）という2編の論文を執筆・公刊した（それぞれ東北大学倫理学研究会編『MORALIA』第19号（2012）、東北大学哲学研

究会編『思索』45号第２分冊 野家啓一先生御退職記念号に掲載されている）。

平成25年度は、メタ存在論的立場の中でもとくに非実在論かつデフレ主義的アプローチに特化して研究を進め、中でも有望とされるH. Priceのpragmatic naturalism路線について検討を進めた。また、この路線の応用例として、いわゆる《自由意志と決定論の問題》に関する対処法としての物語り論的アプローチに着目し、論文「ホモ・ナランスの可能性」をはじめとした野家啓一による一連の「科学のナラトロジー」研究について論点整理を行った上で、その改善の方向性について検討を進めた。前者のpragmatic naturalism路線については、基本的にその内容を「物理主義や科学主義を廃したリベラルな自然主義」「メタ形而上学におけるカルナップ的デフレ主義」「意味論的関係よりも語用論的規範を優先させる語用論主義」「表象概念についての複数主義」という4点にまとめた上で、オーストラリアの一部で提唱されている“Sydney Plan”との関係を整理しつつ、その課題を指摘した。この研究成果については、本研究に着手する以前から取り組みを続けてきた「哲学的自然主義」およびその多元論的展開可能性についての研究成果と接続させ、独自の問題提起へと仕上げたものを、一橋哲学・社会思想学会におけるシンポジウム「ネオ・プラグマティズムの現在」において発表している（学会発表②）。また、後者の《自由意志と決定論の問題》に関する対処法としての物語り論的アプローチに関しては、哲学者に加えて人類学者・宗教学者・文学者・社会学者などから構成される学際的研究グループ（一橋大学大学院社会学研究科 先端研究課題11「脱／文脈化を思考する」：URL=<http://www.soc.hit-u.ac.jp/~decontext/index.html>）の席上で構想発表を行い、他領域に成果発信すると共に意見交換を行うことができた。

平成26年度は、これまでの研究成果を踏まえつつ、論文としてのアウトプットに力点を置いて作業を進めた。具体的には、メタ存在論における反実在論的アプローチの代表例としてpragmatic naturalismをとりあげ、その内容を明確化しつつ問題点を指摘して改善への道筋をつけたこと、および、そのpragmatic naturalismのもとで複数のディスコース間の統合がどの程度要請されるのかという問題について検討を進め具体的仮説を提唱したこと、この２点が中心的なものとなっている。平成25年度の研究成果を引き継ぎつつ達成されたこれらの成果の一部は、「《プラグマティックな自然主義》と３つの課題」（雑誌論文②）および「物語り論的アプローチによる自由意思擁護論の再検討――諸コンテクストはそもそも／どの程度統合されねばならないのか？――」（雑誌論文①）というタイトルのもとで学術論文として公刊されている（それぞれ東北大学哲学研究会編『思索』第47号／座小田豊先生 御退職記念号、および一橋大学大学院社会学研究科編『一橋社会科学』第7巻／別冊：脱/文脈化を思考するに掲載されている）。

なお、本研究の主たる検討対象であると共に基本的に支持が表明されている「メタ存在論における非実在論的デフレ主義」および「pragmatic naturalism路線」については、その基本構想を組み込んだ上でロボット工学分野との共同研究が継続して進められており、研究機関の全体にわたって、折々にその構想についての広報と成果発表が（心理学や情報工学といった異分野の研究者を対象に含めつつ）行われている。これも、本研究の成果の重要な一部と位置づけることができる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　4　件）

① 井頭昌彦，「物語り論的アプローチによる自由意思擁護論の再検討――諸コンテクストはそもそも／どの程度統合されねばならないのか？――」，『一橋社会科学（第７巻別冊：脱/文脈化を思考する）』2015，査読なし（特集論文），pp. 167-189
http://hdl.handle.net/10086/27123

② 井頭昌彦，「《プラグマティックな自然主義》と３つの課題」，東北大学哲学研究会編『思索』，2014，第 47 号（座小田豊先生 御退職記念号），査読なし（特集論文），pp. 221-247
http://hdl.handle.net/10086/27135

③ 井頭昌彦，「プラグマティズム・体系内在主義・物理主義――植原氏、佐藤氏、成瀬氏への回答――」，東北大学倫理学研究会編『MORALIA』，2012，査読なし（特集論文），第 19 号，pp.101-125
http://hdl.handle.net/10086/23251

④ 井頭昌彦，「「心を持ったロボットをつくる」というプロジェクトはどのようなものでありうるか？」，東北大学哲学研究会編『思索』，2012，査読なし（特集論文），第 45 巻第 2 号（野家啓一先生 御退職記念号），pp.389-418
http://hdl.handle.net/10086/23250

〔学会発表〕（計　9　件）

① 井頭昌彦，「哲学的ロボティクス」，物質分子系専攻談話会，2014.10.6，於 大阪市立大学理学部セミナー室（大阪府大阪市）

② 「Pragmatic Naturalism / Sydney Plan とその課題」，一橋哲学・社会思想学会，2014.6.7，於 一橋大学国立東キャンパス第３研究館 3F 研究会議室（東京都国立市）

③ 井頭昌彦,「プラグマティズム概論」, 一橋哲学・社会思想学会, 2014.6.7, 於 一橋大学国立東キャンパス第３研究館研究会議室（東京都国立市）

④ 井頭昌彦, 「「痛みを感じられるロボット」はどうやればつくれるか？」, 日本社会心理学会第 54 回大会ワークショップ「構成論的人間理解論――ロボット工学・社会心理学・科学哲学――」, 2013.11.2, 於 沖縄国際大学（沖縄県宜野湾市）

⑤ 井頭昌彦, 「《可変性を伴う主観的リスク認知》としての安心感」, 日本ロボット学会・安心ロボティクス研究専門委員会（第 7 回）, 2013.11.1, KEEPFRONT 会議室 A（沖縄県那覇市）

⑥ 井頭昌彦, 「第三アンチノミーに対する物語り論的アプローチと〈可能性〉の問題」, 第一回野家哲学研究会, 2013.3.16, ホテルニュー水戸屋（宮城県仙台市）

⑦ 井頭昌彦, 「あるエスノメソドロジー研究についての論理分析」, 社会学研究互助会, 2012.9.9, 成城大学（東京都世田谷区）

⑧ 井頭昌彦, 「哲学的ロボティクスとロボット工学経由の哲学」, 第 12 回 K フォーラム（公益財団法人・栢森情報科学振興財団 主催）, 2012.8.4, ホテルアソシア高山リゾート（岐阜県高山市）

⑨ 井頭昌彦, 「コミュニケーションに『正しい日本語』は必要か？――分析哲学からみた『できる』とは――」, 2012 年度日本語教育学会春季大会・日本語教育学会創立 50 周年記念パネルセッション「『できる』とはどういうことなのか？――他領域との協働による課題解決にむけて――」, 2012.5.26, 拓殖大学文京キャンパス（東京都文京区）

６．研究組織

(1)研究代表者

井頭　昌彦（IGASHIRA, Masahiko）
一橋大学・大学院社会学研究科・准教授
研究者番号：70533321